

SCOLE

2024 年度 社会連携教育センター一年報

法政大学 社会連携教育センター

目 次

| | |
|-----------------------|----|
| センター長あいさつ | 1 |
| 2024 年度社会連携教育センター活動報告 | 2 |
| 正課授業実施報告 | |
| SCOLE 主催型授業 | 5 |
| 学内公募型授業 | 7 |
| 寄付講座 | 17 |
| 正課外プログラム実施報告 | 20 |
| 巻末資料 | 24 |

センター長あいさつ

法政大学社会連携教育センターの目的

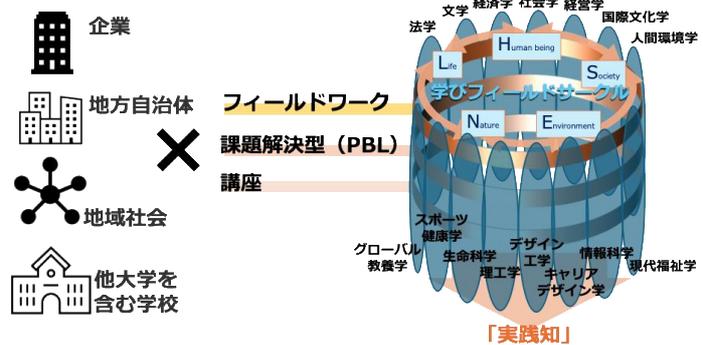
法政大学は、教育研究を介し、現代社会に貢献できる「実践知」を育むことを目標としています。この「実践知」は「知」なのですが、その意味は、今の実社会で役に立つ「知」に留まらず、過去の「知」の見直しや新しい「知」の創造も射程にしています。私たちは「実践知」を育むため、「教育」「研究」を促進させています。従前、「研究」における社会連携は「研究開発センター」などで進められ、その成果は社会貢献として発信されています。他方、「社会連携教育センター」は、「教育」における社会連携を通して、全15学部にも所属する学生個々を対象に、それぞれの「実践知」を育てる「人材育成」を軸と捉え、設置されました。

社会と連携する法政大学での教育

実社会には答えがない課題が溢れています。これに面白がって取り組む学生のマインドを刺激したいと考えています。学生から聞こえる「何に興味があるかわからない」「将来に漠然とした不安がある」などの声は少なくありません。特に、コロナ禍を中等教育で経験した学生から聞こえてきます。これは、彼らの未熟さを示しているのではなく、私たち社会人と同じように、社会のデジタル化が進むなか、溢れる情報の中で自分を確立する現代の難しさを示しているのではないのでしょうか。もう一つの原因は、現代の日本の教育体系と学習量とのギャップです。6-3-3-4-2-3の日本の教育体系は70年以上変わっていません。しかし、学習すべき「知識」や「技術」は70年間で劇的に増えており、学習時間が少ないことは明らかです。知識や技術を取得してから課題解決するのではなく、課題解決する経験から必要な知識や技術の獲得を目指す機会が作ることが、社会連携教育の目指したい方向の一つです。特に、答えがない課題に対して、学生自身の言葉で議論する「経験」です。つまり、予定調和的な「経験学習」は返って、学生が失敗や衝突を恐れ、自分の意見を、自分の言葉で、相手との調和の中で伝えることに躊躇を覚えさせているのかもしれない。つまり、学んだことを、自分自身の関心ごととして考え、問いただく機会を、法政大学は全学部の学生を対象に提供したいと考えています。

社会連携教育センターが主催する正課科目と正課外プログラム

社会連携教育センターが提供する科目やプログラムには3つの特色があります。一つ目は知的機動性を刺激すること。学生それぞれの専攻を刺激するよう、その達成目標を「問題探索力」「課題解決力」「コミュニケーション力」「協働作業力」等の汎用的能力に焦点を合わせています。二つ目は主体性を刺激すること。学生それぞれの主体的学びを刺激できるように、受講生を全学部から募るとともに、



受講学年を問わない履修方式としています。加えて、フィールドワーク・PBL・講座をもちいたアクティブラーニングを学習方法の軸においています。これらは学内で整備されたオンライン学習環境によって支えられています。三つ目は効率的に学習を刺激すること。連携する学びの場「社会」と綿密に打ち合わせ、実社会の現場にある課題をテーマにしています。テーマは、法政大学の「学びフィールドサークル」で内容を確認するとともに、学生に提供する多様なコンテンツ企画にも活用しています。このように、センターでは、「経験」に着目し、「デジタルツール」を活用し、挑戦マインドと失敗から学ぶマインドを養う「教育」プログラムを提供しています。多くの学生らの取り組みを期待しています。

2024年度社会連携教育センター長 山本 兼由
(生命科学部教授)

2024 年度 社会連携教育センター活動報告

1 センター運営体制

| | | |
|------|--------------|---------------------------------|
| 委員長 | ：社会連携教育センター長 | 山本兼由（生命科学部教授） |
| 副委員長 | ：同副センター長 | 高田朝子（専門職大学院イノベーション・マネジメント研究科教授） |
| 委員 | ：教育支援統括本部長 | 菊池克仁（学務部長） |
| | キャリアセンター長 | 梅崎 修（キャリアデザイン学部教授） |
| | 総長室企画課長 | 根本雅弘 |
| | 総長室付教学企画室主任 | 荒井俊樹 |
| | 学務部次長 | 田中一平 |
| 事務局 | ：学務部教育支援課 | |

2 センター活動報告

(1) 教育開発支援機構の他センターとの連携

2024 年度に開催された全 10 回の教育開発支援機構企画委員会に出席し、SCOLE の活動について他センターに情報共有を行った。

(2) 2024 年度正課授業の実施

全学共通教育プラットフォーム「社会連携教育科目」を開講した。社会連携教育科目は、地方自治体や民間企業など、実社会を支えている機関や団体と連携して実施する科目であり、連携先が設定したテーマについて、具体的な問題を発見・整理する問題発見力や、円滑なグループワークを行うためのコミュニケーション力、主体性と協働性をもって課題解決に向かう協働作業力を身に付けることを目指している。

社会連携教育科目は、社会連携教育センターが企画・実施する「SCOLE 主催型」、社会連携に関する授業を学内公募して実施する「学内公募型」、団体・法人等から無償で講義の提供を受ける「寄付講座」の 3 種類があり、2023 年度に開講を決定した社会連携教育科目を以下のとおり開講し、その実施報告を運営委員会で確認した。

a SCOLE 主催型授業

| 科目名 | 大学 DP | 科目副題 |
|---------------------|-----------------|----------------|
| 社会連携 PBL (アドバンス) | DP-IV DP-VII | 地方共創プログラム（杵築市） |

b 学内公募型授業

| 科目名 | 大学 DP | 科目副題 |
|---------------------|-----------------|--|
| 社会連携フィールドワーク（ベーシック） | DP-IV DP-VI | リサイクルファブリックの効率的かつ社会広報効果のある収集・利用方法の同定と法政大学との連携 |
| 社会連携フィールドワーク（ベーシック） | DP-IV DP-VI | カーボンニュートラル推進リーダー育成講座（入門） |
| 社会連携フィールドワーク（ベーシック） | DP-IV DP-VII | 大規模自然災害発生時の大学キャンパスでの避難生活のマネジメント I ～千代田キャンパスコンソおよび近隣企業との連携～ |
| 社会連携フィールドワーク（アドバンス） | DP-IV DP-VII | 大規模自然災害発生時の大学キャンパスでの避難生活のマネジメント II ～多摩キャンパスでの野営の展開～ |
| 社会連携フィールドワーク | DP-IV DP-VI | 引退競走馬のセカンドキャリア構築による人馬のウェルビーイング |

c 寄付講座

| 科目名 | 大学 DP | 科目副題 | 寄付者 |
|-------------------|-----------------|--|---------------------------------|
| 社会連携講座 (ベーシック) | DP-IV DP-VI | 企業における仕事と成長 | 一般社団法人 法政大学 校友会、法政財界人倶楽 部 |
| 社会連携講座 (ベーシック) | DP-IV DP-VI | 金融リテラシー | イオンフィナンシャル サービス株式会社 |
| 社会連携講座 (アドバンス) | DP-IV DP-VII | スポーツビジネスとしての競 馬がもたらす人馬のウェルビ ーイング | JRA 日本中央競馬会 |

(3) 2024 年度正課外プログラムの実施

企業や自治体と連携した正課外プログラムとして、「社会連携プログラム」を実施した。社会連携プログラムでは、PBL (Project Based Learning) の手法を取り、企業や自治体が定めたテーマに対し、学生が業界のリアルな視点を学びながら、課題解決に向けた提案や取り組みを行っている。

2024 年度に実施した社会連携プログラムは以下のとおりである。

| プログラム名 | 連携先 |
|--|-------------------------------|
| 金融リテラシーを身に付けて自分のライフプランを考えよう | 特定非営利活動法人 日本ファイナンシャル・プランナーズ協会 |
| 日本のサラブレッド産業の現場を考察する | 北海道新冠町 |
| 間づくりワークショップ | コマニー株式会社 |
| 「未来の東京」を考える | 東京都 |
| 未来の日本のエネルギーはどうあるべきか ～発電所の現場視察を通じて考える～ | 東京電力ホールディングス株式会社 |

(4) 2025 年度開講正課授業の決定

2025 年度に開講する社会連携教育科目を、「SCOLE 主催型」が 1 授業、「学内公募型」が 1 授業、「寄付講座」が 1 授業とし、各授業の担当教員の決定、シラバス作成、シラバス第三者確認、時間割決定を経て、開講準備を整えた。2025 年度開講社会連携教育科目は以下のとおりである。

a SCOLE 主催型授業

| 科目名 | 大学 DP | 科目副題 |
|--------------------------|-----------------|---------------------------|
| 社会連携 PBL (アドバンス) | DP-IV DP-VII | 地方共創プログラム (松江市) |
| 社会連携フィールド ワーク (ベーシック) | DP-IV DP-VI | カーボンニュートラル推進リーダー育成講座 (入門) |

b 学内公募型授業

| 科目名 | 大学 DP | 科目副題 |
|------------------|----------------|------------------------------------|
| 社会連携フィールド ワーク | DP-IV DP-VI | 引退競走馬のセカンドキャリア構築による人馬のウェル ビーイング |

c 寄付講座

| 科目名 | 大学 DP | 科目副題 | 寄付者 |
|-------------------|-----------------|---|--------------------------------------|
| 社会連携講座 (ベーシック) | DP-IV DP-VI | 企業における仕事と成長 I —校友会講師のビジネス“実践知”からキャリア形成を考える— | 一般社団法人 法政大学 校友会、法政財界人倶楽部 |
| 社会連携講座 (ベーシック) | DP-IV DP-VI | 企業における仕事と成長 II —校友会講師のビジネス“実践知”からキャリア形成を考える— | 一般社団法人 法政大学 校友会、法政財界人倶楽部 |
| 社会連携講座 (ベーシック) | DP-IV DP-VI | 生活に関わるお金の知識講座 | イオンフィナンシャル サービス株式会社 |
| 社会連携講座 (ベーシック) | DP-IV DP-VI | 金融業界における国内外での 就業体験付き実習 | イオンフィナンシャル サービス株式会社 |
| 社会連携講座 (アドバンス) | DP-IV DP-VII | スポーツビジネスとしての競 馬がもたらす人馬のウェルビ ーイング | JRA 日本中央競馬会 |
| 社会連携講座 (ベーシック) | DP-IV DP-VI | パーソナルファイナンス論 | 特定非営利活動法人 日本ファイナンシャル・ プランナーズ協会 |
| 社会連携講座 (ベーシック) | DP-IV DP-VI | キャッシュレスが果たす社会 的役割と可能性 | 株式会社オリエントコ ーポレーション |

(5) 活動の振り返り

センター発足2年目となり、全学共通教育科目に相応しい一定規模の正課科目を開講し、それらの質保証をする体制が整備された。同時に、正課科目のシーズになる正課外プログラムも複数実施できた。特に、これまで正課外プログラムで連携した実績のある特定非営利活動法人日本ファイナンシャル・プランナーズ協会および株式会社オリエントコーポレーションと、2025年度正課科目開講として結実できたことは評価している。これらの経験は、質の高い全学共通教育プログラムを提供できるモデルとなるだろう。

他方、3つの課題が浮き彫りとなった。一つは、2024年度に開講したすべての社会連携教育科目において履修者が想定より少なかった点である。そのため、履修の手引きに学修における当該科目のメリットを加筆したり、チラシ掲示などの広報活動に取り組んだ。二つ目は、正課科目および正課外プログラムとも分野の偏りがあった点である。これは、2025年度に開講する「SCOLE公募型」が1件しかなかったことも影響している。「SCOLE主催型」を活用し、全学共通教育科目として多様な分野での学習機会の提供を検討していきたい。三つ目は、連携先から発展した「寄付講座」に対して担当教員の配当が難しい点である。連携先主導で実施する「寄付講座」は、2024年度の3授業から2025年度は7授業と倍増し、センターを運営する教員のみでは対応できない状態となった。2025年度は手当がない副センター長の協力を得たが、本質的な解決を見出せていない。今後の安定的なセンター運営のためにも、速やかに解決すべき課題である。

3 学内会議

(1) 教育開発支援機構企画委員会

10回 (4/18、5/23、6/13、7/18、9/19、10/24、11/14、12/19、1/23、3/13)

(2) 社会連携教育センター運営委員会

10回 (4/11、5/16、6/6、7/11、9/19、10/17、11/7、12/5、1/16、3/6)

以上

**2024年度全学共通教育プラットフォーム
社会連携教育科目（SCOLE主催型授業）実施報告**

| | | |
|--|-------------------------------------|--------------------------------------|
| 科目名 | 社会連携 PBL（アドバンス） | |
| 科目副題 | 地方共創プログラム（杵築市） | |
| 開講期 | オータムセッション | |
| 担当教員 | 高田朝子（専門職大学院イノベーション・マネジメント研究科教授） | |
| 社会連携先 | 大分県杵築市 | |
| 受講者数 | 11名 | |
| 授業の概要と目的 | | |
| <p>法政大学が進める社会連携・社会貢献・国際協力の中で、過去3年間、社会連携教育センター主催による「地方共創プログラム（島根県松江市、大分県杵築市）」を行ってきた。今年度は、初の正課の授業として、本学創立者（伊藤修、金丸鉄）の出身地である大分県杵築市を対象地域として、地域資源を探る個人ワーク、グループ活動、フィールドワーク、インタビュー調査などを行い、杵築市から提示されたテーマに対する提案プランを発表した。本授業の目的は、日本の地方都市の持つ課題を理解し、与えられた課題に対して自分たちなりのアプローチを行い、課題のソリューションもしくはそれに相当するアイデアを考え、それらを言語化、可視化することである。</p> | | |
| 授業の到達目標 | | |
| <p>日本という国が直面している現状を理解する。特に地方都市において人口減少がどのように進み、それがどのように人びとの生活に影響をおよぼしているのかを理解する。その上で、与えられた課題に対して、自分達で考え、調べ、ディスカッションをし、そして現地で現実を体験し、試行錯誤を繰り返す中で自分達なりのソリューションやアプローチを確立する。</p> <p>加えて、学外の人と関わるためのビジネスマナーを身につけること、プレゼンテーションのやり方を身につけることも副次的な目標とする。</p> | | |
| 授業報告 | | |
| <p>【第1回授業】6月1日（土） ガイダンス・キックオフワークショップ</p> <p>①レクチャー（高田教授）『社会連携 PBL 進め方、TAI モデルを使った地域資源の整理』</p> | | |
| <p>現代につくられた箱物資源 ＜美術館 会議場 博物館＞</p> | <p>生活支援資源 ＜医療 起業 移住生活支援 学校＞</p> | <p>地域の物語資源 ＜コンテンツ アニメ 地域の物語＞</p> |
| <p>歴史的建造物資源 ＜城 町並み＞</p> | <p>県民性 ＜地域性＞</p> | <p>地域イベント ＜祭 イベント＞</p> |
| <p>自然資源 ＜海山＞</p> | <p>食べ物資源 ＜農産物 海産物 畜産＞</p> | <p>伝統工芸物</p> |

②杵築市からのテーマ説明

〈観光関連〉

- ・杵築に行きたくなる→歩きたくなる観光プラン
- ・「重要伝統建造物群保存地区」を活用した観光プラン
- ・空き家等を活用した集客プラン

〈プロモーション関連〉

- ・杵築市マスコットキャラクターを活用したプロモーションプラン
- ・杵築ブランド「きつきのきづき」の認定品を対象とした販売促進プロモーションプラン

【第2回授業】6月15日（土）グループワーク、事前学習ホームワークの確認
 レクチャー『マーケティング』（福井洋子/有限会社アイボリーマーケティング代表）

【第3回授業】7月13日（土）進捗状況報告、マナー及びフィールドワークの説明と注意事項
 グループワーク

【フィールドワーク】9月2日（月）～5日（木）杵築市訪問

| チーム | 日程 | | 訪問先 | ご担当 *敬称略 |
|--------|------|-------|------------|-----------|
| きつ〜きづむ | 9月3日 | 9:00 | 城下町資料館 | 一瀬 勇士 |
| | | 11:00 | 市・観光協会 | 岡本係長 |
| | 9月4日 | 9:00 | SMSビーチハウス | 水内 大樹 |
| | | 11:00 | 奈多宮 | 木村 謙次郎 |
| | | 13:00 | 柳家 | 小倉 倫子（代表） |
| | | 14:00 | 杵築城 | 岡本係長・阿南主査 |
| | | 15:00 | お茶のとまや | 今村 佐和 |
| | | 16:00 | 和楽庵 | 岡本係長（説明） |
| | その他 | 杵築高校 | 高校生（2年、3年） | |

| | | | | |
|--------------|------|-------|----------------|-------------|
| チームAKIYA | 9月3日 | 9:00 | 空き家バンク・ブランド | 後藤課長補佐他1名 |
| | | 11:00 | 山香文庫 | 牧野 史和 |
| | | 13:00 | 商工会 | 小野 剛 |
| | | 14:00 | うつりくらす | 中野リカ子（代表理事） |
| | | 15:00 | 古民家カフェ（まめのもんや） | 村上しのぶ |
| | 9月4日 | 9:00 | 空き家（興津家） | 阿南主査（説明） |
| 奈多宮より全員で同一行動 | | | | |

【第4回授業】10月5日（土）フィールドワーク振り返り、グループ進捗状況の発表

【第5回授業】10月16日（土）リハーサル/プレゼンテーションブラッシュアップ

【最終発表会】11月23日（土）

**2024年度全学共通教育プラットフォーム
社会連携教育科目（学内公募型授業）実施報告**

| | |
|---|---|
| 科目名 | 社会連携フィールドワーク（ベーシック） |
| 科目副題 | リサイクルファブリックの効率的かつ社会広報効果のある収集・利用方法の同定と法政大学との連携 |
| 開講期 | サマーセッション |
| 担当教員 | 小川浩孝（キャリアデザイン学部兼任講師） 酒井理（キャリアデザイン学部教授） |
| 社会連携先 | 双日インフィニティ株式会社 文化服装学院 VMI パートナーズ合同会社 株式会社早稲田大学アカデミックソリューション DX 推進室 東洋大学 ボランティア支援室 大妻女子大学 短期大学・地域連携推進センター事務部 株式会社ストーム 21 聖学院大学 サステイナビリティ推進センター 株式会社 R1000 エコモーション株式会社 ナカノ株式会社 |
| 受講者数 | 14 名 |
| 授業の概要と目的 | |
| 「大学等と連携し、タイのリサイクル繊維を用いた大学ブランドのアパレルを製作し、キャンパスなどで販売する」というアイデアの実現に向けて、大学関係者、アパレル業界関係者、リサイクル業者などへのヒヤリング調査を行い、本アイデアの実現可能性の精査と、具体的なプランを大学生のフレッシュな視点で立案する。 | |
| 授業の到達目標 | |
| 学生たちはチームに分かれ、それぞれ、大学関係者、アパレル業界関係者、リサイクル業界関係者へヒヤリングを行い、実施プランをチームごとにまとめ、授業の最後にそれらを発表する。これらを通じてヒヤリング調査はどのように組み立てればよいか、実現性のある具体的なプランはどのように作成し、プレゼンテーションすれば良いかなどの知識と経験を得る。授業終了後は希望学生を募り作成したプランをさらに磨き上げ、実行フェーズに移す。 | |
| 授業報告 | |
| 第 1 回・第 2 回授業に相当： 本プロジェクトの元となったこれまでの経緯、製品やそのコンセプトの説明、授業の目的やゴールの説明、インタビュー先の特徴説明、学生同士の自己紹介とインタビューを行う際のグループ分け（3 グループ）を実施。また、教員から、インタビューに役立つ基礎知識として「マーケティング」概念の説明を 30 分ほどスライドを用いて説明した。その後、インタビュー先に応じたインタビュー内容の考案をグループごとに行い、学生グループごとに教員が Q&A 形式で相談に乗った。 | |

各グループはリーダーとサブリーダーを決め、彼らが各グループの予定調整や連絡係を務めた。また、リーダーから各インタビュー先に連絡を取り、挨拶とインタビュー日時・内容の確認を行った。また、インタビューにあたっての法政大学学生としての礼儀やマナーについての注意点も教員から全員に説明した。

第3回授業から第12回授業に相当：

計5日間に渡り、インタビュー先を訪問もしくはオンラインミーティング、あるいはインタビューを受けて下さる方が法政大学を訪問され、90分程度のインタビューを各グループで実施。教員はインタビューの予定が重なってしまった1件のインタビューは全編、および2件のインタビューは部分的に立ち会えなかったが、それら以外の7件のインタビューは全て立ち会い、学生たちの質問等で不十分な場合などは補助を行なった。

なお、各回のインタビュー終了後にグループリーダーを主体とし学生同士で話し合い、そのインタビューのまとめや次回インタビューに向けての質問準備などを行なった。教員はあえてその場には立ち会わず、学生たちが主体的に考えまとめられるように誘導した。また、インタビュー後にチームリーダーからインタビュー協力者に御礼のメールをし、感謝の気持と今後への協力を求めた。別途教員からもメールを送り、謝礼の提示と今後への協力を依頼した。

第13回、14回授業に相当：

日程の最終日に再度学生全員が集まり、グループごとにインタビュー結果の報告、発見、今後のプランの提案などをスライドにまとめた。その後グループごとに20分程度の発表と質疑応答を行い、教員からまとめと感想を伝えた。また、全員でまとめのディスカッションを行った。その過程において、このプロジェクトに継続して関わって行きたいと申し出た者が複数いたため、他にいるか聞いたところ、14名のうち10名が関わって行きたいと申し出たため、名前や連絡先を確認して授業を終了した。

| | |
|---|--|
| 科目名 | 社会連携フィールドワーク（ベーシック） |
| 科目副題 | カーボンニュートラル推進リーダー育成講座（入門） |
| 開講期 | 秋学期 |
| 担当教員 | 三田地真実（教育開発支援機構兼任講師） 小秋元段（文学部教授） |
| 社会連携先 | 那須塩原市 日産自動車株式会社 東京ガスエンジニアリングソリューションズ株式会社 |
| 受講者数 | 16名 |
| 授業の概要と目的 | |
| <p>カーボンニュートラルを達成するために、地球規模の環境・社会問題の構造の理解を深める。具体的には、カーボンニュートラルを推進している企業・自治体・大学等の取組について学ぶために、企業及び本学キャンパスの施設見学等のフィールドワークを実施する。最終授業では、法政大学へのカーボンニュートラルに関する取組の提案を行う。そのために、様々な問題解決のために必要な話し合いの技術であるファシリテーションも学ぶことを目的とする。</p> | |
| 授業の到達目標 | |
| <ol style="list-style-type: none"> 1.カーボンニュートラルを達成するために、地球規模の環境・社会問題の構造の理解を深め、身近なところからアクションを起こすことができる。 2.環境・社会問題を解決していくための話し合いの技術（ファシリテーション）を学び、他の課題解決に対しても応用できる（毎回、ファシリテーションミニ講座を設定）。 3.法政大学に対し、チームでカーボンニュートラルに関する取組の具体的な提案を行う。 | |
| 授業報告 | |
| <p>第1回～第3回（9月28日）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 ガイダンス 2 法政大学の取組 本学施設保全部による説明 3 那須塩原市の取組 塩原市による講義 「那須塩原市におけるカーボンニュートラルに関する取組について」 <ul style="list-style-type: none"> ・青木地区ゼロカーボン街区構築事業 ・地域企業と連携した脱炭素化事業 ・EV普及促進事業 4 グループワーク | |

第7回～第9回（10月12日）

東京ガスの取組

- 1 東京ガスエンジニアリングソリューションズ株式会社による講義
「2050年カーボンニュートラル実現に向けて」
 - ・国内外エネルギー政策を取り巻く環境
 - ・東京ガスグループのカーボンニュートラル実現に向けた取り組み
 - ・法政大学で採用されているカーボンニュートラル都市ガス（CNL）について
- 2 施設見学
- 3 グループワーク

第10回～第12回（10月26日）

法政大学の取組（多摩キャンパス）

- 1 社会学部 澤柿教伸教授 講義
「南極から迫る気候変動」
 - ・診断医としての南極観測隊
 - ・人新世におこる南極の異変
 - ・イノベーションを起こすとき
- 2 池田寛二名誉教授（元社会学部教授）、社会学部 鞠子茂教授 講義
「多摩キャンパスの森林からカーボンニュートラルを考えよう」
 - ・森林とカーボンニュートラルの複雑な関係
 - ・世界の森林の現状と課題
 - ・国土の7割近い日本の森林と気候変動
 - ・多摩キャンパスの森林の過去・現在・未来
- 3 森林バイオマスの推定および土壌有機物分解速度の測定
- 4 グループワーク

第13回～第14回（11月16日）

最終プレゼンテーション

法政大学へのカーボンニュートラルに関する取り組みの提案

カーボンニュートラル推進特設部会委員による講評

| | |
|--|--|
| 科目名 | 社会連携フィールドワーク（ベーシック） |
| 科目副題 | 大規模自然災害発生時の大学キャンパスでの避難生活のマネジメント I ～千代田キャンパスコンソおよび近隣企業との連携～ |
| 開講期 | サマーセッション |
| 担当教員 | 伊藤マモル（法学部教授） 藤岡成美（法学部准教授） 水野雅男（現代福祉学部教授） |
| 社会連携先 | 一般社団法人・防災教育普及協会 富士見・飯田橋駅周辺地区帰宅困難者対策地域協力会 LINE ヤフー株式会社 日産自動車 千代田区キャンパスコンソ |
| 受講者数 | 66名（本学 54名、大妻女子大学 1名、共立女子大学 1名、高大連携高校生 10名） |
| 授業の概要と目的 | |
| 大規模自然災害に関する知識を深めるとともに、災害発生直後を想定したキャンパス内における帰宅困難者としての宿泊体験を通じ、多様な避難者および避難施設で生じる可能性が高い健康および環境衛生等の問題に着目し、臨機応変に対応することの難しさを学ぶ。また、防災行動に対する複眼的な目を養うことで、サステナブルな防災意識向上に資する大学教育の在り方を探る。 | |
| 授業の到達目標 | |
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 帰宅困難者支援施設の運営にボランティアとして携わることになる学生もまた被災者であるという心構えを考える。 2. 1を踏まえた上で、不特定多数の帰宅困難者や予期せぬ多様な問題への対応を検討し、千代田コンソーシアム大学や近隣企業との連携を視野に問題解決を図る。 | |
| 授業報告 | |
| I. 授業計画について 授業は全3日間であり、以下の計画に沿って進行した。 <u>2024年8月2日(金) 1日目</u> <ol style="list-style-type: none"> 1.オリエンテーション 2.備蓄倉庫見学・トイレ実習・救命救急講習 3.グループワーク（大規模自然災害下を想定した食事） 4.グループワーク（災害発生直後の帰宅困難者の受け入れ）：授業2回分に相当 <u>2024年8月3日(土) 2日目</u> <ol style="list-style-type: none"> 5.グループワーク（帰宅困難者受け入れ施設での宿泊体験に関する振返り） 6.講義および実習（東京家政学院大学と日産自動車との授業） 7.講義「テレビと大災害 帰宅困難者支援施設とネットメディアとの連携」 8.講義およびワークショップ「IT企業の取り組み 防災教育ツール」 <u>2024年8月5日(月) 3日目</u> <ol style="list-style-type: none"> 9.シンポジウム「大規模自然災害発生後に必要な支援」 10.グループワーク（大学生）、備蓄倉庫の見学（高校生） 11.KUGの実施 12.KUGの振返りと発表準備 13.発表・討議・総括 | |

II. 履修生について

本学学生 54 名（法学部 34 名・文学部 1 名・経営学部 1 名・人間環境学部 7 名・キャリアデザイン学部 1 名・社会学部 3 名・デザイン工学部 1 名・GIS1 名・理工学部 4 名）に加え、千代田区内近接大学の高等教育連携強化コンソーシアム大学の学生（2 名）が単位互換科目として履修するとともに、最終日のみ履修した高大連携高等学校の生徒（10 名）の合計は 66 名であった。また、授業の見学者として近隣企業所属の 1 名と専修大学ボランティアサークル所属の学生 5 名は宿泊以外のプログラムに参加した。これらのことから、多様な学生が共に学ぶという相乗的学習の効果を得られたと思われる。

III. 各授業について

1. 「前半」の 1 泊 2 日（100 分×9 回に相当）では、疑似的な帰宅困難者滞在施設を想定した「市ヶ谷キャンパス内」での宿泊体験型フィールドワーク（＝防災キャンプ）を行った。
 - 1) 第一日目：ガイダンス、事前学習、健康に関する定量的測定、宿泊に伴う衛生管理（主にトイレ実習）、帰宅困難者支援施設の見学、非常食・備蓄食の食事、就寝の準備等
 - 2) 第二日目：普通救命講習、本学における帰宅困難者施設に関する問題点の共有、地域社会における帰宅困難者支援に関する課題の認識
2. 「後半」は帰宅困難者受け入れ施設運営ゲーム（＝KUG）を用いた演習（100 分×5 回に相当）によって発見した”気づき”や”問題”を解決するための提言作成を目指した。
 - 3) 第三日目：防災キャンプの振り返りを共有後、KUG に関する事前学習として、シンポジウムを行い、帰宅困難者受け入れ施設や避難所の機能や問題点を認識する。その上で、KUG による机上演習に取り組み、その学習成果を発表した。発表成果に基づき、本学をはじめとする関係諸機関（千代田区、千代田コンソーシアム大学、近隣企業等）への提言をまとめた。
3. スマートフォンのアプリケーションを利用した自らの健康情報（睡眠時間、心拍数、歩数、消費エネルギー等）の収集・記録を行う等の事前事後の学習を実施した。
4. 防災キャンプでは、大規模自然災害直後を想定し、電気や水が利用できない場合を想定したトイレ実習、調理実習（非常食または屋外での炊き出し）を行い、体験に基づく感想や気づき等の情報を共有し、問題解決に取り組んだ。
5. 防災キャンプは、市ヶ谷総合体育館 3F および 5F を使用するグループと、校舎内（教室）を使用するグループに分かれ、異なる環境に滞在した場合の健康管理等の諸問題に取り組みます。なお、寝具として学生 1 名に対して毛布 1 枚を配布し、1 日目の夕食と 2 日目の朝食については非常食を配給した。
6. 授業前 2011 年に起こった東日本大震災のホットラインとして、その普及が始まった LINE を教材として用い、本科目における問題解決に資するさらなる活用方法を検討した。本授業履修者で構成する LINE グループにおいては、個人情報扱いについては慎重に対応した。

| | |
|---|--|
| 科目名 | 社会連携フィールドワーク（アドバンス） |
| 科目副題 | 大規模自然災害発生時の大学キャンパスでの避難生活のマネジメントⅡ ～多摩キャンパスでの野営の展開～ |
| 開講期 | スプリングセッション |
| 担当教員 | 水野雅男（現代福祉学部教授） 伊藤マモル（法学部教授） |
| 社会連携先 | 非営利活動法人 日本防災士会 |
| 受講者数 | 18名 |
| 授業の概要と目的 | |
| 我が国における被災地での避難所生活は、小中学校の体育館に雑魚寝というもので、人道支援活動のスフィア基準に照らし合わせて、難民キャンプよりも劣るとも言われている。その改善案（代替案）として、大学キャンパスでの避難生活拠点の設営の必要性とその運営体制の重要性を学ぶとともに、心身両面の健康を維持するための留意点についても学ぶ。 | |
| 授業の到達目標 | |
| 人間の尊厳を守る「豊かな生活」、多様性を尊重した「社会的包摂」という2つの観点から避難生活の改善策を検討し導き出す。さらに、避難生活の安全性、快適性の向上を目指して、大学キャンパスや周辺地域の資源を活用した設営のあり方を検討するとともに、その運営に欠かせない様々な技術を修得する。 | |
| 授業報告 | |
| 本授業では、多摩キャンパスにおける野外生活に重点を置いた避難生活のありようについて、検討の上実証実験（体験学習）に取り組んだ。 | |
| 第1日 300分 （教室でのレクチャー＋学内外でのフィールドワーク） | |
| ① ガイダンス（水野） 本授業の目的とスケジュールの確認、履修生の自己紹介等 | |
| ② キャンパス内の備蓄状況の確認（小池） 非常時対応の方針の確認と備蓄倉庫内の視察 | |
| ③ 配水所での非常時対応の実習（小池） 寺田配水所で非常時給水設備の設営と給水体験 | |
| ④ 避難生活での健康維持の要点とその計測（伊藤） エコノミークラス症候群や感染症を防ぐための留意点とバイタルチェック手法の紹介 | |
| 第2日 300分 （学内でのグループワーク） | |
| ⑤ 国内外の避難生活の実態（水野） 我が国とイタリア等の避難所設営と避難生活基盤や運営体制の比較、様々な課題の提示 | |
| ⑥ グループ編成（水野） チームビルディングの要点の提示、グループ結成 | |
| ⑦ キャンパス内の滞在環境整備方針の検討（グループワーク） 屋外・屋内の避難スペース、生活インフラ設備や備蓄品等を確認した上で、滞在環境整備の方針を検討 | |

第3日 500分（教室でのレクチャー＋学内でのフィールドワーク）

⑧ 避難所の設営と運営の要点（正谷）

避難所を設営、運営する際に留意すべき要点の紹介

⑨ キャンパス内での避難生活空間の設営プラン検討（グループワーク）

季節や気候条件、収容する避難者の属性を想定して、キャンパス内での避難生活空間の設営イメージを検討し、発表する

⑩ キャンパス内での避難生活空間の設営と宿泊体験

多様な属性の避難者を想定した上で、屋外空間で野営滞在する空間（テント等）を設営し、宿泊を体験する

第4日 300分（教室でのグループワーク）

⑪ 避難所の設営・運営上の課題と政策提言の検討（グループワーク）

宿泊体験を通じて感じた避難所設営・運営上の課題について、快適性、安全性、包摂性の各視点からとりまとめ、発表する

⑫ 野外設営の撤収片付け

テント等の撤収と会場の後片付け

| | | |
|---|---|--|
| 科目名 | 社会連携フィールドワーク | |
| 科目副題 | 引退競走馬のセカンドキャリア構築による人馬のウェルビーイング | |
| 開講期 | サマーセッション | |
| 担当教員 | 高見京太（スポーツ健康学部教授） | |
| 社会連携先 | 地方競馬全国協会 NPO 法人日本障害者乗馬施設フューチャーバレー 法政大学体育会馬術部 | |
| 受講者数 | 15名 | |
| 授業の概要と目的 | | |
| <p>「人馬のウェルビーイング」の理念を踏まえ、馬の生態と進化、競走馬の育成からのセカンドキャリアに関する知識を深めます。これを土台に、人と馬との最適な関係を追求し、関連する課題を特定して、解決の基本的手法を探ることを目指します。</p> | | |
| 授業の到達目標 | | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・競馬の背後にある文化や学び、そして人々の交流を知る。 ・引退競走馬のセカンドキャリア構築の手法を理解する。 ・人馬のウェルビーイングを前進させるためのアプローチを見つける。 | | |
| 授業報告 | | |
| 回 | 各回のテーマ | 各回の目標 |
| 1 1日目 8/5 | ガイダンス 12:30～13:00 川崎校地 | 本授業の概要と目的、到達目標を確認し、フィールドワークを実施する際の受講ポイントを説明する (高見教授) |
| 2 1日目 8/5 | 「人馬のウェルビーイング」の基礎知識 13:00～14:00 川崎校地 | 「人馬のウェルビーイング」についての基礎知識を理解する (柏村監督) |
| 3 1日目 8/5 | フィールドワークⅠ 競馬場でのレース前の競走馬観察 15:00～16:30 川崎競馬場 | 競馬場での競走馬を観察し、馬の挙動や馬を引率する人の役割を理解する (柏村監督) |
| 4 2日目 8/6 | フィールドワークⅡ 引退競走馬のリトレーニングの基礎 9:30～10:00 城山地区 | リトレーニング手法の一つである「グラウンドワーク」のデモンストレーションを見学し、実務現場を理解する (柏村監督) |
| 5 2日目 8/6 | フィールドワークⅢ 人馬のウェルビーイングの実践(触合い活動の実践) 10:00～11:00 城山地区 | 馬の性質を理解するために、人馬のウェルビーイングによる引退競走馬との触合いを体験する (深野講師) |
| 6 2日目 8/6 | 地方競馬教養センターの基礎知識 15:30～18:30 地方競馬教養センター | 地方競馬並びに教養センターを理解する (地方競馬教養センター講師) |
| 7 3日目 8/7 | フィールドワークⅣ 騎手候補生の訓練馬として活躍する引退競走馬の観察 5:30～8:00 地方競馬教養センター | 騎手候補生の訓練馬として活躍する引退競走馬のセカンドキャリア構築現場を観察する (地方競馬教養センター講師) |

| | | |
|-----------------|---|---|
| 8 3日目 8/7 | フィールドワークⅤ 地方競馬教養センターの施設見学 9:30～11:30 地方競馬教養センター | 騎手候補生が日々訓練を積み夢に向かって研鑽を積む教養センター施設を見学する（トレーニングルーム見学、馬場整備体験など） （地方競馬教養センター講師） |
| 9 3日目 8/7 | 地方競馬教養センター生徒と受講生の懇談 13:00～14:00 地方競馬教養センター | 教養センター生徒と受講生が交流の場を持ち、共通の話題として引退競走馬の役割について議論しつつ、多岐に渡る懇談を楽しむ （地方競馬教養センター講師） |

**2024年度全学共通教育プラットフォーム
社会連携教育科目（寄付講座）実施報告**

| | |
|---|------------------------|
| 科目名 | 社会連携講座（ベーシック） |
| 科目副題 | 企業における仕事と成長 |
| 開講期 | 春学期 |
| 担当教員 | 佐野哲（経営学部教授） |
| 社会連携先 | 一般社団法人法政大学校友会、法政財界人倶楽部 |
| 受講者数 | 19名 |
| 授業の概要と目的 | |
| <p>法政大学校友会（本学を卒業した OBOG を中心に構成される組織）及び法政財界人倶楽部（本学卒業の上場企業取締役経験者を中心に構成される組織）との連携のもと開講される、オムニバス形式の講義です。豊かなビジネス経験を持って高い地位を築き、仕事と母校への情熱を有する校友会・財界人倶楽部メンバー（卒業生）が集まって講師陣となり、そのキャリアの中で体得した「実践知」の内容やノウハウについて、様々な事例や出来事を示しながら自らの言葉で解りやすく解説します。これは卒業生が現役学生にエールを送る場であり、履修者が卒業生の経験を共有、理解することを通して、自らの今後のキャリア形成について独自かつ具体的に考える機会となります。</p> | |
| 授業の到達目標 | |
| <p>就職活動や卒業を控えた学生は、自分が卒業後のビジネス社会で「どう働き、どう成長していくのか」具体的なイメージが掴みきれず、漠然とした不安を感じているのではないか。また、学生らが現在思いを巡らす将来像、将来計画そしてそのための取り組みや努力の正しさについて、日々悩んでいるのではないか。この社会連携講座は、そうした在学生の不安感に、それを乗り越え実績を積み重ねた卒業生らが自らの言葉で応えようとするものです。その意味で、この講義の目標は「学生と卒業生の対話」であり、履修者の到達目標としては「ビジネス界の先輩（講師となる卒業生）が有する企業での経験を共有し、自らの意見を述べ、コミュニケーションを深めていく能力（コミュニケーション能力）の向上」となります。</p> | |
| 授業報告 | |
| <p>校友会パートナー組織「法政財界人倶楽部」より、4名の講師（株式会社セブン&アイ・ホールディングス元社長 村田紀敏氏、ミサワホーム株式会社元会長・現校友会会長 竹中宣雄氏、住宅金融支援機構 元副理事長 池谷文雄氏、プラス株式会社 副社長 浅野紀美夫氏）が3週ずつ担当するオムニバス形式で実施した。</p> <p>各第1～第2週でそれぞれの業界説明や経験を講義することで、受講生は最前線のビジネス経験、そして上場企業取締役相当まで経験した方ならではの考え方・行動指針等を学ぶことができた。</p> <p>また、講義中に MC 教員から講師に対し、時代背景や現代学生の考え方とのギャップを踏まえた上での質問がいくつも挟まれることで、単なる過去の武勇伝ではなく、現代に則したビジネス理論・働き方の指針を得られる内容となった。</p> <p>毎回のコメントペーパーはもちろん、講義時には同時進行で X（元 Twitter）にて受講生からの質問を受け付け随時回答する手法を取ると共に、第3週は受講生からの質問、意見を述べてもらい徹底的に回答する対話形式を取ることで、受講生は豊富な意見表明の機会を持つことができ、コミュニケーション能力の向上が図られた。</p> | |

| | |
|---|---------------------------|
| 科目名 | 社会連携講座（ベーシック） |
| 科目副題 | 金融リテラシー |
| 開講期 | 春学期 |
| 担当教員 | 山本兼由（生命科学部教授・社会連携教育センター長） |
| 社会連携先 | イオンフィナンシャルサービス株式会社 |
| 受講者数 | 92名 |
| 授業の概要と目的 | |
| 金融リテラシーを体系的に学び、人生と生活を考えるうえで重要な事項を理解し、自分で必要な情報を集め、比較・検討して判断することが出来るようになる実践的な力を身につける。 | |
| 授業の到達目標 | |
| 経済的に自立し、より良い生活を送るために必要な、経済や金融についての知識と判断力を学ぶ。学んだ知識を活かし、適切な金融商品・金融サービスを選択でき、将来の生活設計（ライフプラン）が作成できるようになる。 | |
| 授業報告 | |
| 受講者 92 人へ実施した本講義について、学生より、「ライフプラン設計の結果、赤字になってしまったけど今考えておくことで将来どこを見直していけばよいかを明確にすることが出来た。また、この講義で初めて何十年も先の自分の人生設計を考えたことは良い経験となった。」「ライフプランを作成して、子供を育てる養育費や自分自身の将来の老後などを考えると、人生はお金がかかると改めて感じた。長期的な視点を持ち、若いうちから計画的に資産形成することや、お金の使い方を考えて生活したい。」などの感想を受け、授業の成果は十分達成できたと思料します。 | |

| | |
|---|------------------------------------|
| 科目名 | 社会連携講座（アドバンス） |
| 科目副題 | スポーツビジネスとしての競馬がもたらす人馬のウェルビーイング |
| 開講期 | 秋学期 |
| 担当教員 | 高見京太（スポーツ健康学部教授） 佐野竜平（現代福祉学部教授） |
| 社会連携先 | JRA 日本中央競馬会 |
| 受講者数 | 53名 |
| 授業の概要と目的 | |
| <p>競馬で主に注目を集めるのは競走馬であるが、その背後には幅広い領域において多くの専門家が支えることで成り立っている。また、競馬は、我が国における大きな産業の一つでもあり、馬のレースというだけではなく、人々の暮らしに様々な影響を与えている。本講義では競馬をテーマとして、スポーツビジネス、サステイナブルな社会、そして人馬のウェルビーイングのあり方について学ぶ。</p> | |
| 授業の到達目標 | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・ 競馬の歴史、国内外の競馬界、競走馬、競馬場について知り、スポーツとしての競馬を説明することができる。 ・ 競馬ビジネスの戦略を理解し、ビジネスとして成立させている要因とその運営を支えるメカニズムについて関係づけることができる。 ・ 競走馬のセカンドキャリアについて学び、人馬のウェルビーイングにつながる引退競走馬の利活用について述べるることができる。競馬の歴史、国内外の競馬界、競走馬、競馬場について知り、スポーツとしての競馬を説明することができる。 | |
| 授業報告 | |
| <p>各回に実施した復習テストの正答率は約 85%であり、競馬に関する理解が深まったと考えられる。また、2回のフィールドワーク後および全 14 回の講義終了後に提出された計 3 本のレポートから、競馬や競走馬のセカンドキャリア、人馬のウェルビーイングに対する理解は十分に得られたと判断できる。</p> | |

2024 年度社会連携プログラム（正課外）実施報告

| | |
|--|---------------------------------|
| プログラム名 | 金融リテラシーを身に付けて自分のライフプランを考えよう |
| 実施期間 | 2024 年 8 月 5 日（月）・6 日（火）・8 日（木） |
| 社会連携先 | 特定非営利活動法人 日本ファイナンシャル・プランナーズ協会 |
| 参加者数 | 13 名 |
| 実施報告 | |
| <p>本プログラムは、経済的に自立し、より良い生活を送るために必要な金融リテラシーを学び、自身のライフプランニング（生活設計）やそれに伴う資産形成について考えることをテーマに実施しました。ファイナンシャル・プランナー（CFP®認定者）として実績が豊富な講師が、実務での経験を活かし具体的な事例を交えながらレクチャーを行い、合間にはグループワークを実施しました。グループワークでは、お互いのお金に対する考え方や使い方をディスカッションしたり、仮想の家族を設定してライフプランニングに取り組んだりしました。最後は、キャッシュフロー表の作成をとおして、自身のライフプランについて深く考え、講師からフィードバックとアドバイスをいただきました。</p> <p style="text-align: right;">（巻末資料 1）</p> | |

| | |
|--|----------------------------------|
| プログラム名 | 日本のサラブレッド産業の現場を考察する |
| 実施期間 | 2024 年 9 月 2 日（月）・9 日（月）～12 日（木） |
| 社会連携先 | 北海道新冠町 |
| 参加者数 | 9 名 |
| 実施報告 | |
| <p>本プログラムは、我が国が世界に誇る一大産業であるサラブレッド産業（軽種馬産業）を、その現場である北海道新冠町の町役場と生産・育成牧場とで連携することにより、産官学連携の基で「地方創生」を主眼に実地学習することを目的に実施しました。</p> <p>新冠町役場、新冠町のサラブレッド生産牧場である「サンローゼン（明和）」・「竹中牧場（美宇）」・「中地牧場（朝日）」・「ナスノファーム（東泊津）」・「豊栄牧場（高江）」、新冠町のサラブレッド育成牧場「キタジョファーム（共栄）」、新冠町の乗馬クラブ「にいかっぶホロシリ乗馬クラブ（西泊津）」、北海道庁が主催するホッカイドウ競馬の門別競馬場（日高町）の各連携先に多大なご協力をいただき、大変有意義で実りあるフィールドワークを展開することができました。</p> <p>初日の 9 月 2 日（月）には多摩キャンパスの馬術部馬場にて繋養している、錦岡牧場寄贈馬である引退競走馬をモデルに馬の生態を学びました（今回は台風の影響でオンラインへ変更）。</p> | |

新冠町学習初日の9月9日（月）は町役場にて鳴海修司町長を表敬訪問し、企画課原口正也係長からの新冠町とサラブレッド生産・育成牧場の概要講義を受講しました。その後、にいかっふホロシリ乗馬クラブにて北海道の広大な大地での引退競走馬への体験乗馬も実施しました。9月10日（火）と11日（水）は、上記5つの生産牧場にご協力いただき、学生がそれぞれ朝から夕方まで、牧場業務の体験と新冠町のサラブレッド産業の各所を訪問しての実地学習に取り組みました。最終日の9月12日（木）は午前中に町役場にて、今回のフィールドワークで学習した事柄についてのグループワークとプレゼンテーションを実施しました。「生産現場」で体感したことを基に、町の課題解決、まちづくりの観点で新冠町への提言をまとめました。町長と町役場職員の皆様、生産牧場の皆様もご来場され、緊張感が漂う中で温かい眼差しを注いでくださり、激励を込めた講評をいただくことができました。

修了課題として、参加学生は1,000文字以上の「サラブレッド産業でのフィールドワークを通じて」と題したレポートを作成し、町役場と各生産牧場へ提出しました。本プログラムを通して参加学生の一人一人がサラブレッド産業への理解を深め、新冠町に同産業がどのように根付いているか肌で感じ、地方創生について多様な視点で学習を進めることができました。

（巻末資料2）

| | |
|--|------------------------------|
| プログラム名 | 間づくりワークショップ |
| 実施期間 | 2024年8月29日（木）・9月3日（火）・18日（水） |
| 社会連携先 | コマニー株式会社 |
| 参加者数 | 5名 |
| 実施報告 | |
| <p>本プログラムでは、レクチャーとフィールドワークを通じてデザイン思考を学び、「学生にとっての価値ある空間とは何か」を考え、グループで間づくりの提案発表を行いました。</p> <p>8月29日（木）は、コマニー株式会社本社（石川県小松市）でフィールドワークを実施しました。コマニー株式会社本社では、フロアごとにテーマ設定された空間づくりがされており、おしゃれで機能的な空間に、学生からも感嘆の声が上がりました。まずは企業理念や沿革、事業内容などをご説明いただき、実際にパーテーションを製造している工場を見学しました。また、デザイン思考についての具体的なレクチャーを踏まえ、実際に働いている社員の方に、空間の使い方や気に入っている場所、感じている課題等をヒアリングしました。商品やサービスを使うユーザー視点から課題を見つけ、解決策を考えることは2日目以降のワークにつながる学びとなりました。</p> <p>9月3日（火）は、前回の振り返りを行った後、学生チームと社員チームに分かれて行うグループワークを挟みながら、「間づくり」に関するレクチャーを受けました。その後、提案発表の課題場所である学生ラウンジ（市ヶ谷キャンパス富士見坂校舎3階）に移動し、空間の調査を行いました。</p> | |

最終日の9月18日（水）は、学生ラウンジを学生にとっての価値ある空間にする提案発表を行いました。学生チームはペルソナ（架空のユーザー像）を「地方から上京し今年大学に入学したばかりで、都会の流行やおしゃれについていけず悩んでいる男子学生」と設定したうえで、この悩みを解決できる間づくりを考えました。「明日の服に悩んでない？～もっと自分らしさを求めて～」をテーマに、季節にあわせたファッションの展示スペースや、実際に服を試着できるスペースを設定し、服装をきっかけに学生同士の交流を促進できるような間づくりを提案しました。等身大でリアルなペルソナ設定と、学生の視点を活かした斬新な提案に、コマニー株式会社の社員の皆様からはポジティブな評価をいただきました。また、学生チームとは対照的に「自分が求めている場所を選べるリラックス空間」をテーマとした社員チームの提案を受け、同じ空間であってもペルソナの設定によって異なる提案が生まれる面白さを学生も体感したようでした。

（巻末資料3）

| | |
|---|-----------------------|
| プログラム名 | 「未来の東京」を考える |
| 実施期間 | 2024年10月11日（金）・18日（金） |
| 社会連携先 | 東京都 |
| 参加者数 | 10名 |
| 実施報告 | |
| <p>本プログラムは、東京都の長期計画の策定に向け、10年後、20年後の「未来の東京」に関するアイデアや夢について自由な意見交換を通して考えることをテーマに実施しました。</p> <p>まず東京都のご担当者より、東京都の長期計画や重点政策方針について説明があり、その後、キャリアデザイン学部 酒井理教授の進行・ファシリテーションのもと、「イノベーションと経済活力」「都市の魅力づくり」「都市災害の防止」のテーマに沿って3つのグループに分かれてディスカッションを行いました。各グループには東京都のご担当者が1名ずつ入り、学生の質問に回答いただいたり、有益なアドバイスやフィードバックをいただきました。</p> <p>最後は、グループでディスカッションしてまとめた内容（現状分析、2050年の東京の理想の姿、2035年を目指して何をすべきか等）を東京都の職員の皆様に向けて発表しました。全グループに共通して、「人とのつながりやコミュニティづくりの大切さ」が発表から感じられ、東京都のご担当者からは、「今でこそ自治体が婚活イベントを開催したりするようになったが、ひと昔前は、自治体がコミュニティづくりを積極的に行うことに抵抗が示される風潮があった。時代とともに社会が変化し、若者世代はむしろコミュニティづくりに重点をおいた政策を求めているんだなということを実感した」とのコメントをいただきました。</p> | |
| （巻末資料4） | |

| | |
|--|---|
| プログラム名 | 未来の日本のエネルギーはどうあるべきか ～発電所の現場視察を通じて考える～ |
| 実施期間 | 2025年2月20日(木)・28日(金)・3月5日(水)・10日(月)・13日(木)・18日(火) |
| 社会連携先 | 東京電力ホールディングス株式会社 |
| 参加者数 | 11名 |
| 実施報告 | |
| <p>本プログラムは、わが国のエネルギーを取り巻く現状や課題を把握するとともに、首都圏に電力を供給する火力発電所や原子力発電所のフィールドワークを通じて、発電所の現場や課題などを深く考察することをテーマに実施しました。参加者は、3つのチームに分かれて「日本のエネルギー政策は長期的にどのような方向に進むべきか」を検討し、最後に提言を発表しました。</p> <p>2月20日(木)は、ファシリテータより基本的な課題解決の手法を学んだうえで、東京電力ホールディングスのご担当者から日本のエネルギー事情と課題についてレクチャーを受けました。</p> <p>2月28日(金)は神奈川県<small>の</small>川崎火力発電所でフィールドワークを行いました。株式会社 JERA のご担当者から火力発電の仕組みや発電所の取り組み、再生可能エネルギー戦略等のレクチャーを受けた後、実際に稼働している発電所構内の設備を見学しました。</p> <p>3月5日(水)は、東京電力ホールディングスのご担当者から福島第一原子力発電所の事故と廃炉作業、事故を踏まえた柏崎刈羽原子力発電所の安全対策について学びました。</p> <p>3月10日(月)は新潟県の柏崎刈羽原子力発電所でフィールドワークを行い、展示施設で原子力発電所の模型や核燃料棒のサンプルを見たり、福島第一原子力発電所の事故を受けて対策した発電所構内の現場や設備を見学するとともに、日常的に実施している訓練等についても説明を受けました。</p> <p>その後、これまで学習した知識やフィールドワークを通じて感じたことを踏まえ、3月13日(木)に各チームで発表に向けた検討や意見交換を深め、最終日の3月18日(火)に東京電力ホールディングス株式会社本社にて発表を行いました。東京電力ホールディングス株式会社と株式会社 JERA の社員の皆様から、アイデアやプレゼンテーションに対して具体的な質問やコメントをいただき、最後は、プログラム内容の理解習得度、課題分析、斬新性・未来志向、チームワークといった観点で最優秀賞に評価されたチームが表彰されました。</p> | |
| (巻末資料5) | |

巻末資料

1 社会連携プログラム「金融リテラシーを身に付けて自分のライフプランを考えよう」 (2024年8月5日・6日・8日)

応酬はこちらから！

※法政大学Gmailへのログインが必要です

法政大学社会連携教育センター主催
法政大学×日本FP協会

社会連携プログラム（正課外）

金融リテラシーを身に付けて
自分のライフプランを考えよう

大学生の今こそ、「お金」について考えてみませんか。
人生には様々なお金の支出があり、今後、就職・結婚・育児・住宅取得・老後といった場面において支出が伴ってきます。
このプログラムでは、経済的に自立し、より良い生活を送るために必要な**金融リテラシー**を学び、**みなさん自身のライフプラン**（生活設計）やそれに伴う**資産形成**について考えます。

ファイナンシャル・プランナー（CFP®認定者）として実績が豊富な外部講師が、実務での経験を活かし具体的な事例を交えながらレクチャーします。
最後は、キャッシュフロー表の作成をおして、皆さんに自身のライフプランについて考えていただきます。

実施日程（全3回） ※詳細は裏面参照

2024年8月5日（月） 13:00～15:00 法政大学市ヶ谷キャンパス
 8月6日（火） 13:00～15:00 法政大学市ヶ谷キャンパス
 8月8日（木） 13:00～15:00 法政大学市ヶ谷キャンパス

お問い合わせ 法政大学教育開発支援機構 社会連携教育センター
 事務局：学務部教育支援課 kyoiku@hosei.ac.jp



2 日本のサラブレッド産業の現場を考察する
(2024年9月2日・9月9日～12日)

法政大学社会連携教育センター (SCOLE) 社会連携プログラム (正課外)

日本のサラブレッド産業の現場を考察する



参加者募集! ※写真はイメージです

日程/2024年9月2日(月) 9月9日(月)～12日(木)

対象/本学学部学生(通学課程)
場所/本学多摩キャンパス 北海道新冠町

参加費/15,000円
申込み/右記QRコードから
※法政大学Smartへのログインが必要です

「なぜ地方創生が必要なのか?」
「地方創生には何か必要なのか?」

サラブレッド産業にフォーカスし、業界の基礎知識を学びます。引退競走馬との縁色いや畜産牧場、育成牧場そして肉用競馬場での多くのフィールドワークを通じて、サラブレッド産業を広く把握・理解し、産業が地域にどのように根付いているのか等、地方創生を深く考えます。

開講スケジュール (詳細は裏面参照)

9/2 (月) 本学多摩キャンパスでの本プログラム講師によるキックオフ・ワーク
講師: 高見 宗太 (本学スポーツ健康学部教授)
深野 聡 (本学現代福祉学部兼任講師)
柏村 直史 (本学体育会馬術部監督)

9/9 (月)～9/12 (木) 北海道新冠町でのフィールドワーク (3泊4日) 計5日間

協力: 新冠町役場 新冠町
後援: 法政大学後援会
お問い合わせ: 社会連携教育センター事務局 (学務部教育支援課) kyoiku@hosei.ac.jp

法政大学 HOSEI University





3 間づくりワークショップ (2024年8月29日・9月3日・18日)

主催：法政大学社会連携教育センター 後援：法政大学後援会
法政大学×関西大学×コマニー株式会社

社会連携プログラム（正課外）

学生にとっての価値ある空間とは？
ワークショップを通じて大学へ提案しよう！

間づくり ワークショップ

デザイン思考をじっくり学ぶ3日間

お申込みはこちら
7月31日

会場 コマニー株式会社本社（石川県小松市）
法政大学砺波キャンパス

定員 両大学合計 20名

参加費 募集要項を参照

プログラム

- コマニー本社でサフェスの間づくりを学ぶ
- 大学内の価値ある空間とは何か？
課題解決に向けて議論を深めよう
- 大学に発して間づくり提案を実施しよう

スケジュール（全3回） ※詳細は募集要項を参照

2024年8月29日（木）
8：40 砺波田舎楽舎集合→20：00 砺波田舎楽舎解散
コマニー株式会社本社（石川県小松市）

2024年9月 3日（火）13：00～17：00
法政大学砺波キャンパス
※法政大学・関西大学等をオンラインで併授し実施

2024年9月18日（水）13：00～17：00
法政大学砺波キャンパス
※法政大学・関西大学等をオンラインで併授し実施

お問い合わせ 法政大学教育開発支援機構 社会連携教育センター
事務局：学務部教育支援課 電話 03-3264-4268 EMail kyo@hokai.ac.jp





4 「未来の東京」を考える (2024年10月11日・18日)

法政大学社会連携教育センター主催
法政大学×東京都

社会連携プログラム(正課外)
「未来の東京」を考える

東京都の長期計画の策定に向け、10年後、20年後の「未来の東京」に関するアイデアや夢について、自由な意見交換を通して考えます。参加者の皆さんには、以下5つのテーマから希望のテーマを選択し、グループに分かれてディスカッション・発表をしていただきます。

テーマ

- ①多様で公平な社会の実現
- ②イノベーションと経済活力
- ③都市の魅力づくり
- ④環境都市
- ⑤都市災害の防止

※詳細は応募フォーム参照

実施日程(全2回) ※詳細は次頁参照

2024年10月11日(金) 10:40~12:20 法政大学市ヶ谷キャンパス
10月18日(金) 10:40~12:20 法政大学市ヶ谷キャンパス

進行/ファシリテーター

酒井 理 (キャリアデザイン学部教授)

参加すると…

- ☆東京の課題や問題点について、政策立案の視点から深く考えることができる!
- ☆都庁の職員と直接意見交換ができる!

TOKYOの将来をみんなで語り合おう!

お問い合わせ 法政大学教育開発支援機構 社会連携教育センター
事務局: 学務部教育支援課 kyoiku@hosei.ac.jp



5 未来の日本のエネルギーはどうあるべきか ～発電所の現場視察を通じて考える～
 (2025年2月20日・28日・3月5日・10日・13日・18日)

主催：法政大学社会連携教育センター (SCOLE) 後援：法政大学後援会
 法政大学×東京電力ホールディングス株式会社

社会連携プログラム (正課外)

未来の日本のエネルギーは どうあるべきか

～発電所の現場視察を通じて考える～

私たちの生活に欠かせないエネルギー。多くの人があたり前に利用していますが、2011年3月の東日本大震災では原子力発電所の事故により首都圏への電力供給が不足し、計画停電が実施される事態も起こりました。

このプログラムでは、わが国のエネルギーを取り巻く現状や課題を把握するとともに、首都圏に電力を供給する火力発電所や原子力発電所のフィールドワークを通じて、発電所の現場や課題などを深く学びます。学生の皆さんは、今後の日本のエネルギーのあるべき姿について取りまとめ、最後に提案いただきます。

フィールドワーク先は川崎火力発電所 (神奈川県川崎市) と柏崎刈羽原子力発電所 (新潟県柏崎市) です。良質な機会となりますので是非お申し込みください！

申込はこちらから→
 2025年1月31日 (金) まで

実施日程 (全6回) ※詳細は裏面参照

- 2025年2月20日 (木) 13:00～17:00 @法政大学市ヶ谷キャンパス
オリエンテーション/日本のエネルギーについて考える①
- 2025年2月28日 (金) 川崎火力発電所9・45棟集合～13:00頃解散
川崎火力発電所でのフィールドワーク
- 2025年3月5日 (水) 13:00～17:00 @法政大学市ヶ谷キャンパス
日本のエネルギーについて考える②/グループワーク
- 2025年3月10日 (月) 東京駅8:00頃集合～21:00頃解散
柏崎刈羽原子力発電所でのフィールドワーク
- 2025年3月13日 (木) 13:00～17:00 @法政大学市ヶ谷キャンパス
日本のエネルギーについて考える③/中間発表/グループワーク
- 2025年3月18日 (火) 13:00～17:00 @東京電力本社 (新橋)
最終発表

お問い合わせ 法政大学教育開発支援機構 社会連携教育センター
 事務局・学務部教育支援課 kyoiku@hosei.ac.jp

